

〈報告要旨〉

報告1 森林保全の担い手と現代山村—和歌山県龍神村の事例—

関西学院大学研究員 藤村 美穂

本報告の課題は、現代山村という観点から森林の担い手問題について考えることである。森林保全の担い手については、林業経営の担い手問題として論じられることが多かった。とくに林政の分野では、林業の資本主義経済への組み込みという構造的な関心にもとづいて、担い手問題が考えられてきた。そこで注目されてきたのは、効率的な森林生産の生産力としての担い手であり、村落共同体については、自立経営を妨げる要因としてとらえられていた。しかし、近年になって、山村の過疎化やそれに伴う林業労働力の不足問題が顕在化してくるにつれて、「むら」の重要性が主張されるようになった。林業を維持するためには労働力の源である山村を維持しなければならないと考えられるようになり、林政の分野のほうから森林社会学の必要性が主張されるようになった。このような、森林の担い手が山村であるという認識は、育林放棄による森林の公益的機能の低下が顕在化するとともに大きな社会的関心をよび、現在の森林交付税の議論とも結びついていったと考えられる。

社会学の分野では、過疎化や村落構造という関心から山村が研究されてきたが、森林保全の問題を正面から取り上げたものは少なかった。近年、林業に対する山村の新しい取り組みの事例や、現行法体系のもとにおいても入会林野の管理や生産森林組合の運営がムラの論理によって行われている事例が報告されている。

本報告で扱うのは、これらの事例とは逆に、ムラが森林保全の担い手とはなっていない山村の事例である。もちろん、事例地においても近隣のつきあいや村落の組織や祭りは存在するし、林業関係の職についているものが多い。過去においては、生活林としての森林とは切り離すことが出来ない暮らしを営んでいたし、現在においても、山菜を取りに行くなどのかかわりはある。しかしながら、現在そこにあるのは、杉や桧が植林され、林業経営の対象となった山であり、多くの者にとっては「生活の必要」ということから切り放された山なのである。

報告では、このような現代山村においては、森林の担い手についてどのように考えればいいのかということ、事例にもとづいて考察・問題提起したい。